

保育者養成におけるコミュニケーションをテーマとした造形活動 —造形活動による幼児と高齢者間の世代間交流に対する支援事例から—

矢野 真
(児童学科教授)

田爪 宏二
(京都教育大学准教授)

吉津 晶子
(熊本学園大学准教授)

1. はじめに

本研究は、保育者養成におけるクロス・トレーニング・プログラムにおいて行われたコミュニケーションをテーマとした造形活動の事例について、その有効性を検討するものである。

これまでのクロス・トレーニング・プログラムにおいて、筆者らは「型取り制作」(2012)、「モビール制作」(2013)、「ペンダント及び壁面制作」(2014)について、その学びの効果に関する検証として、学生の活動に対する行動観察と実習記録における自由記述の質的な分析を通して、以下の点を導出した。

造形活動を中心とした本プログラムにおける各段階の活動を通して、「造形技術」、「子どもへの援助技術」、「高齢者への援助技術」、「子ども—高齢者間のかかわりに対する援助技術」において、それぞれの場面に即した学生の学びがみられ、実践的な保育技術の向上が窺われた。

特に、表現活動への援助や造形を通じた保育者としての専門的なかかわりについて、高齢者への援助技術の獲得が子どもに対するそれ以上に促されたことが窺われた。この結果について、高齢者とのかかわりはこれまでの乳幼児への援助を中心とした実習経験の中では体験できなかったことであり、学生にとっては新たな学びにつながり、援助技術の獲得の実感に繋がったと考えられる。これらの結果は、「具体的な造形技術を学び、技能を習得する」、「子どもと高齢者、それぞれへの支援のあり方について考える」という本プログラムの目的に沿った成果を示すものであると考えられる。

2. 本研究の目的

こうした実践の成果を踏まえ、世代間におけるコミュニケーションを意識した、造形教材の開発にかかわる実践を深める必要があると捉え、特に世代間交流アクティビティの一環として、地域の材料を活かすことを大切な事項とした。

そこで、地域の材料を活かした人と人との「コミュニケーション」をテーマとした造形活動を取り上げ、学生の学びについて造形の視点から検討を行うことにした。具体的には、これまでの研究結果をもとに、コミュニケーションを促すという目的のため、①造形の課題を簡単なものにする、②感触を取り入れることを大切な事項とした。

ところで、保育者が幼児や高齢者に関わりながら、必要以上に介入をせず、一歩引いた形で幼児—高齢者間の交流を促す形の支援である「間接的支援」は、世代間交流、特に本研究で取り上げる世代間のコミュニケーションの促進において有効であると考えられる。しかしながら、田爪・吉津・溝邊・矢野(2014)によればこれは学生にとっては難しい技法であるとされている。このため、本研究では実践に先立ち間接的支援に関する講義を実施し、造形活動における間接的支援を意識した支援の特徴について検討する。

3. 教材検討の実践と方法

3-1. 目標と内容

今回の教材検討を実践するにあたり、以下の点を目標に掲げた。

①子どもと高齢者をつなぐ造形活動プログラム

のための準備を行う。

- ②具体的な造形技術を学ぶ。
- ③子どもと高齢者、それぞれへの支援のあり方について考える。

また、その内容については、「地域の材料を使った造形制作」として、学生と子ども・高齢者が地域の自然を活かした共同制作を行うことができるように設定した。

3-2. 対象

実践における対象は、KG大学社会福祉学部

に所属する2015年度4年生・9名とした。
なお、本研究における実践には、クロス・トレーニング・プログラムに参加する学生以外に、京都のKJ大学で幼児造形を研究する4年生・4名がボランティアスタッフとして参加した。そのため、幼児・高齢者（沖縄）、そして学生（熊本・京都）といった様々な地域からの交流も促すことができる内容とした。

4. 事前学習について

4-1. 事前学習の目標と内容

本プログラムにおける造形活動は、世代間交流アクティビティの一環として位置付けられているため、造形活動の事前学習における具体的な目標と内容については、以下の通りとした。

- ①子どもと高齢者をつなぐ造形活動プログラムのための準備を行う。
- ②具体的な造形技術を学ぶ。
- ③子どもと高齢者、それぞれへの支援のあり方について考える。

造形活動のテーマを設定するにあたり、実践的教材としての「人と人とのコミュニケーション」、「素材のもつよさ」を大切な事項とした。そこで、感触や身近な素材としての紙粘土や木、貝殻などを使った立体制作を事前学習に取り入れることにした。

実施は、平成27年7月11日（土）の10：00～13：00、KG大学校舎にて実施した。

4-2. 調査の対象

調査対象であるKG大学社会福祉学部の保育

者養成課程に所属する2015年度4年生・9名は、本プログラム参加までに、保育士及び幼稚園教員カリキュラムの保育実習ⅠおよびⅡ、教育実習ⅠおよびⅡを修了している。

この対象は、造形活動についても同様とした。

4-3. 事前学習における教材の検討

2012～2014年度にかけて行った造形活動の反省として、作品の技術における難易度が高いほど、高齢者が関わる頻度が少なくなることがわかった。そこで、今回は教材の難易度をやさしくし、且つ子どもや高齢者が触覚などの感覚を楽しみながら活動ができることを大切な事項とした。また、学生については紙粘土と貝殻などを使った制作体験を通じて、必要な技能を身につけることを大切な事項とし、その活動を通じてどのように支援していくかを考えるように導入を行った。

実践後、テーマである「コミュニケーション」を踏まえ、後半の造形活動プログラムを学生たち全員での組み立てを行い、テーマや材料、交流の方法、制作過程についての確認や、材料の収集と準備を行った。

5. 造形活動について

5-1. 交流を深めるためのテーマ設定

造形活動では、「海の世界」をテーマに、国頭村の子ども・高齢者及び実践を行う学生が、地域の自然を活かした貝殻などを使い制作を行うことにした。貝殻については、高齢者の体力や活動時間を考慮し、実践前日に学生全員で協力し収集を行った。

実施は、平成27年9月4日（金）の10：30～12：00とし、楚洲あさひの丘にて行われた。

実践は、子どもと高齢者、及び子ども・高齢者と学生たちとの交流を深めながら、①紙粘土の感触を楽しみながら、「粘土エクササイズ」を行う ②紙粘土に絵の具を混ぜながら色のある粘土をつくり、貝殻を使って海の世界を表現する（図1）という手順で行った。



図1 紙粘土を使って自ら選んだ貝殻などを貼り付ける

5-2. 「粘土エクササイズ」の導入

制作において、幼児及び高齢者が感触を楽しむことができるように、「粘土エクササイズ」を導入で行った。これは、幼児造形を研究するKJ大学の学生からKG大学の学生と交流する際に提案された(図2)。



図2 「粘土エクササイズ」を説明する学生

「粘土エクササイズ」は、使用する粘土を握る・ひねる・つまむなど自分の手で確かめながら粘土の感触を楽しんだ後に制作を行うことにより、より様々なかたちが期待できるものである。特に3~4歳半頃の子どもの粘土活動では、少量が加工に用いられ 残量は塊であることが多く、おだんご・ひもなど「造形期のはじまり」の時期に「粘土エクササイズ」を行うことにより、様々なかたちが作品にあらわれる

ことが多い(図3)。



図3 粘土エクササイズ後の3歳児作品例(「ケーキをつくろう」)

はじめのうちは、数名の高齢者が造形活動は難しいという理由をつけて拒否をしている姿がみられたが、子どもたちが「粘土エクササイズ」を楽しむ姿に引張られ、次第に紙粘土を手を持つようになり、その感触を笑顔で楽しむ姿がみられた。過去3回の造形活動においても積極性がみられなかった高齢者が、今回の活動では熱心に粘土の感触を楽しむ姿もみられた(図4)。



図4 粘土の感触を楽しむ高齢者

5-3. 紙粘土と貝殻による「海の世界」

実際の制作では更なる交流を深めるために、子どもと高齢者、学生の3名が一組で活動を行った。

直径8cm程度の市販されるコルクのコースターを土台に用いて、それぞれが紙粘土と貝殻を自由に組み合わせて「海の世界」を表現していった。学生たちは、子どもと高齢者が関わる

ことができるよう、間接的な支援を工夫しながら制作に参加していた(図5)。実際に制作が始まると、高齢者は子どもたちの姿を見守りながらも作品づくりに取り組んでいる姿がみられ、子どもたちも高齢者とコミュニケーションを図りながら粘土等に取り組む姿がみられた。



図5 子ども・高齢者・学生が関わる姿

また、学生たちは高齢者や子どもへの声かけを配慮することにより、さまざまな貝殻を組み合わせ、かたちをつくる支援を行っており、材料が持つ感触を楽しみながら作品として組み合わせている様子もみられた。全体的に高齢者が制作に対する困難さを感じている様子はみられず、笑顔で制作している姿が多くみられた。

完成した作品(図6・7)は、学生たち全員で協力しながら、施設の正面玄関へ設置した。



図6 完成作品(部分)



図7 完成作品(全体)

6. 結果と考察

本研究で実践した造形活動について、学生の実習記録の分析を行い、学生の学びの内容について検討する。具体的な分析の視点としては、まず、学生の実習記録における活動記録およびそれに対する考察の記述を文単位で区分し、実習の目的に沿って「対象者(幼児、高齢者)の理解」、「世代間(幼児—高齢者)の交流」、「保育者としてのかわり」の3つのカテゴリーに分類した。その上で、本研究の目的を踏まえ、各カテゴリーの中で造形活動、および造形活動を通した世代間のコミュニケーションに関する事例を抽出し、その特徴について検討する。さらに、実習を通した子どものラーニングストーリーに関する記述についても検討する。

以下では、それぞれのカテゴリーにおける記述内容について代表的なものを示し、その傾向について検討する。

6-1. 「対象者(幼児、高齢者)の理解」に関する記述

(1) 幼児の理解

・活動の記録

- ① 最初は、固まりの作品を作っていたのが、徐々に伸ばしてみたり、ぎゅっと握ってみたり、粘土の使い方自体にも変化が見られました。
- ② 粘土をのぼしたり、つぶしたり、色を混ぜたりすることにとっても興味を示していました。
- ③ 「どんなおうちにしようかなー」と自分の作

りたいモノをしっかりと想像し製作を行って
いた。カニの家を作ることにし、カニの親子
を作り置いていた。

- ④ 作ったものを指さしながら、「ここがお魚が
まわりを回る竜宮城で、これがお魚がもって
きた宝箱、中にお魚の宝物が入っているん
だ」と説明しており（以下略）。
- ⑤ 周りの子たちが貝がらやサンゴを使っている
のを見て、次からはサンゴを使った作品を
作ったり、コースターの上に貝がらを置いて
みたり海のものを使った作品を作ってくれま
した。
- ⑥ 子どもたちは、高齢者の方の作品をよく見て
いました。すると、自分にはない飾りをつ
かっていたり、かわった形を見て、「すごい
あれ」と言い、自分もまねをしようとしてい
ました。

・考察

- ⑦ 粘土の感触にすごく驚くと共に、色を混ぜて
色が変わるのを目で楽しむことができ良か
ったです。子ども自身もすごく楽しみながら作
品をつくっていたので良かったです
- ⑧ 制作活動には時間制限など競うものがないの
で、フィールドビンゴのときは一番であるこ
とにこだわっていたAくんの心に余裕があ
ったように感じた。

造形活動の特徴として、活動記録において子どもが粘土の感触への興味を示している姿(①②)がみられ、この素材が子どもの興味を惹きつけるものであったことが窺われる。さらに、海のものを作るというテーマを反映して、自分で想像して制作したり(③)、作品からイメージを膨らませている様子(④)も窺われる。コミュニケーションの特徴としては、同世代である他の子どもや、高齢者の影響を受けるなど(④⑤)、集団(交流)活動の特性を反映した記述がみられている。これらは世代間の直接的な関わりではないものの、造形活動を媒介とした高齢者とのつながりのきっかけになっていると考えられる。考察においては、子どもと粘土とのかかわりの様子(⑥)や、活動の特性を反映した子どもの心情に言及した記述(⑦)がみられた。

(2) 高齢者の理解

・活動の記録

- ① (子どもが自分の作品を説明するのを聞いて)、Mさんは「子どもの世界はいいね、よくできたねー」と言っていた。AくんはMさんにほめられ嬉しそうで、Mさんも楽しそうに笑顔を浮かべていた。
- ② (子どもが高齢者の作品を真似しようとして) どうやって、そのような形をするのかをいろいろ試していたので、一緒に、こうかなと、やっている、とても楽しそうでした。それを見て、高齢者の方も笑顔になられていました。

・考察

- ③ 子どもの発する小さな一言が、高齢者には聞
こえてないことが多いので、「〇〇ちゃんが
〇〇って言ってますよ！」と伝えることで、
気持ちを伝え合うことができると思いました。

学生の記述においては、高齢者の単独の特徴に触れたものは少なく、高齢者に関しては多くが次項で取り上げる世代間(幼児-高齢者)の交流の中で述べられていた。少ないながらも、高齢者の特性に関する記述としては、活動記録においては、子どもの持つ世界観を理解し感心している姿(①)や、自分の作品が子どもに影響を与えていることに喜んでいる姿(②)がみられている。これらも前に述べた幼児の理解と対応して、造形活動を媒介とした子どもとのコミュニケーションを促すきっかけになっていると考えられる。考察においては、活動を通して高齢者のもつ能力の特性(③)に対する気づきがみられている。

6-2. 「世代間(幼児-高齢者)の交流」に関する記述

・活動の記録

- ① 初めは恥ずかしがっていたHちゃんだったが、
紙粘土に色を混ぜ始めると、利用者に「見て、
ピンク〜」と見せたり、自然とピースを貼る
係とサンゴを飾る係に分担されていたりと、
Hちゃんが利用者と一緒に1つのものを作り
上げようとしている。

- ② 自分から「粘土こんな色になったよー。」とNさんに見せてあげている姿も見られました。
- ③ Tくんは、普段の保育所での様子とは全く違い、とても大人しくしていました。楽しくないのかなと不安だったのですが、制作はどんどん進み、高齢者の方とも関わっていました。子どもなりに高齢者のペースに合わせているということなのかなと思いました。

・考察

- ④ 高齢者と関わる時、Aくんは少し恥ずかしがっていたようだが、Mさんの方からAくんに話しかけ、歩み寄る姿が何度も見られ、次第にAくんからもMさんに作ったものを見せたりと積極的になった。
- ⑤ コミュニケーションのとり方として、言葉を発するだけではないと思います。(中略) 高齢者の方は、子どもに慣れたのか、積極的に関わっていた。子どもは、話し掛けたりはしないが、高齢者の行動に、とても興味を持っているようだった。
- ⑥ Hちゃんも利用者も、お互いにコミュニケーションをとろうという気持ちがあったので、私が間に介入しなくても、お互いの存在を意識しあって、一緒に一つの作品を作ろうという姿を見ることができました。
- ⑦ 会話がなくても、同じ場所にいるだけで意識し合い、影響を与えることができているのだと感じました。
- ⑧ SちゃんがNさんの行動を真似したということは、意識して活動ができていたことの表れだと考えました。

幼児と高齢者との交流に関する記述においては、造形活動の特徴を反映した世代間のコミュニケーションに関する内容が多くみられている。具体的には、子どもから高齢者にかかわったり(①②)、子どもなりに高齢者のペースに合わせて(③)共同で制作を進めている様子が捉えられていた。他方、緊張してコミュニケーションがうまく取れない子どもに対しては高齢者からかかわっている様子が考察において記述されている(④⑤)。また、子どもと高齢者の間で言葉によるコミュニケーションがみられない場合でも、お互いが意識し、協力しながら活動が行われていることが窺われた(⑤⑥⑦⑧)。つま

り、幼児と高齢者との間で会話が難しい場合であっても、作品制作活動が媒介になって世代間の交流が促されているといえ、これは本研究で実践した造形活動のテーマである「コミュニケーション」に関する効果を示していると考えられる。

6-3. 「保育者としてのかかわり」に関する記述

・活動の記録

- ① Sちゃんは最初粘土で作品を作り始めた時に大好きなピンク色にしてハートの形を作っていました。(中略)、せっかく海の建物を作るのだからと思い、「貝がらをここに付けてみたらどう？」とたずねてみました。
- ② 二者の関わりが少なかつたため、利用者さんの製作過程を見るよう促し、相手を意識させることにしました。
- ③ 今回の造形プログラムでは、間接支援ということ意識して保育をしたことで、最初は関わりがあまり見られなかったが、後ろに引きぎみだったNさんが、前のめりになって作っている姿や、粘土を半分Nさんに分けるSちゃんの姿が見られました。

・考察

- ④ 保育者が入りすぎず、双方が関わることができる場を作ることで、お互いがお互いを意識して活動を行うことができたと思います。
- ⑤ 子ども、高齢者、自分と、ペアができているところを見てみると、間接的支援をすることで、子どもと高齢者の距離が縮まり、深く交流ができていたと思いました。
- ⑥ 言葉がなくても、繋がっているということが分かり、世代間交流の支援では、介入しすぎず、寄り添い見守ることが大切だと分かりました。
- ⑦ 世代の異なる二者を繋げるという支援は、とても難しく、それぞれの心に響く声かけや視点も違うなあと感じました。

造形活動や世代間交流における、学生の保育者としての支援の特徴については、子どもに対して、活動の意図を伝えたり(①)、高齢者を意識させようとする記述(②)がみられた。こ

れらは、学生が主に幼児に対して働きかけ、世代間のコミュニケーションを促進させようとしていると解釈できる。

本研究では世代間交流におけるコミュニケーションの促進においては、保育者の間接的支援が効果的であると考え、実践に先立ち間接的支援に関する講義を実施した。それを反映して、間接的支援を意識したかかわり(③)や、それによって幼児と高齢者との交流が促進されたという効果を認識する記述がみられている(④⑤⑥)。但し、世代間の交流を促進する支援の難しさを感じていることを示す記述もみられている(⑦)。

6-4. ラーニングストーリーに関する記述

ラーニングストーリー(Carr, 2001)とは、保育における子どもの学びの過程を記述していくアセスメントの手法であり、その中にはいくつかの要素と目標が設定されている。本研究では、学生に対して造形活動を通した子どものラーニングストーリーに関する記述を求めている。これについて、本研究において検討する造形活動および造形活動を通した世代間のコミュニケーションの特徴を明らかにするために、記述を「創造性・表現力」と「コミュニケーション」という学びの要素に分類した。以下では、それぞれのカテゴリーにおける記述内容について代表的なものを示し、それぞれの記述の事例から、造形活動およびそれによる世代間のコミュニケーションの特性を反映した子どもの学びの過程について検討する。

・創造性・表現力

- ① 粘土を伸ばしたり、つぶしたり、絵の具を混ぜたり、色な形や粘土の変わり方をみてたのしむことで、子ども達は、創造性、表現力を身につけるために、多様な方法を発見し発展することのできる環境を経験していると思う。
- ② 最初、粘土で作品を作っているSちゃんは、いつもの感じで固まりの作品を作っていたけれど、周りの人の作品を見てこういうのでもいいんだ、と新たな方法を発見し、自分もやってみようという意識が芽生えたのではな

いかと思います。

- ③ 子どもたちは、今回行った海の町をすることで、紙ねんどを使い、創造的、表現的な芸術の中で使われる素材や技法の特性を学んでいる。
 - ④ 形をつくるのに、いろいろ試しているのは、創造的、表現的な芸術の中で使われる素材や技法の特性を知っているように見える。
- ・コミュニケーション
- ⑤ 利用者のものを見て、「きれい！すごい！」と言い、自分の感情や、気持ちを表現し、利用者とのコミュニケーションをとることができた。
 - ⑥ 子どもが、高齢者の方の作品を見て、まねをしようとしていたのは、他者への反応、他者と交流するための能力を身につけているように見える。
 - ⑦ Aくんは作った作品を見せ、それをほめてもらうことで、自信が付き、情緒的欲求が満たされ、個人として尊重されていると感じることができた。
 - ⑧ 子どもは、切る、組み合わせる、色をぬるなどの技術を身に付けながら、他者への反応、他者と交流するための能力を身につけていく。

まず、創造性・表現力に関する記述について、学びの要素(創造性、表現力を身につけるために、多様な方法を発見し発展することのできる環境の経験)から、素材とのかかわり(①)や他者の表現に触れることで(②)創造性・表現力が養われていることが窺われる。また、造形活動において素材や技法の特性を新たに学ぶ姿(③)や、子どもが持っている能力が生かされている様子(④)が記述されている。

コミュニケーションに関しても、高齢者の作品に対して感想を表現すること(⑤)や、自分の作品に取り入れること(⑥)、さらには高齢者から評価されること(⑦)、さらに、造形活動における技術がコミュニケーションに繋がっているとする記述(⑧)もみられた。

6-5. 分析のまとめ

今回の造形活動に関する学生の記述をまとめると、まず、学生は造形活動における素材とのかかわりや制作活動から子どものもつ創造性や表現力についての理解を深めていると考えられ

る。また、世代間交流については、主に造形活動を媒介とした幼児と高齢者とのコミュニケーションの促進という側面から捉えられていた。

さらに、活動における支援においては幼児、高齢者および両者の交流に対する間接的支援に留意しながら、世代間におけるコミュニケーションを促進しようとしていることが窺われた。

以上のように、本研究で用いた教材は、「コミュニケーション」をテーマとした実践的教材として有効であり、保育者養成にかかわる実践的教材として新たな可能性がみられた。このような成果が得られた背景について、本研究における造形活動の特徴を踏まえると、以下の点が推察される。すなわち、まず、素材として使用した紙粘土と貝殻の特性である。手の感覚を楽しむことができる紙粘土の感触は、高齢者とともに低年齢の幼児にも興味をひくものであり、活動への動機づけを高めたと思われる。そして、地域の素材としての貝殻は特に高齢者にはなじみ深いものであると考えられ、活動への興味を促すことに繋がったと考えられる。

次に、昨年度は「型取り制作」や「モビール制作」で課題となった造形技術の難しさについての問題点を解消するために、難しい技術を必要としない「ペンダント及び壁面制作」を活動に取り入れたが、今回は感触を重視した活動を取り入れ、幼児、高齢者ともに素材の持つ楽しさを味わいながら取り組む題材とした。本研究では、昨年と同様に難しい技術を必要としない制作活動であることに加えて、感触を重視した活動を取り入れたことで、幼児、高齢者ともに素材の持つ楽しさを味わいながら取り組む課題となったと思われる。そして、特に本研究では世代間交流に対する間接的支援に留意した実践が行われたが、今回の題材は幼児及び高齢者が比較的取り組みやすい課題であり、学生が必要以上に制作に介入する必要がなかったために、間接的支援が効果的に行われたと考えられる。

そのため、本研究における制作活動は世代間の共同作業が生まれやすいものであり、世代間のコミュニケーションを育むうえで有効であったと考えられる。

引用・参考文献

- Carr, M. (2001). *Assessment in Early Childhood Settings: Learning Stories*. SAGE Publications.
- 田爪宏二・吉津晶子・溝邊和成・矢野真 (2014). 保育者志望学生における世代間交流への支援の特徴—クロス・トレーニング・プログラムの実践から— 日本発達心理学会第25回大会発表論文集, p. 485.
- 矢野真・田爪宏二・吉津晶子 (2013). 保育者養成における子どもと高齢者をつなぐ造形活動—保育者を目指す学生の学びを中心に、日本世代間交流学会誌, Vol. 3, pp. 67-76.
- 矢野真・田爪宏二・吉津晶子 (2014). 保育者養成における地域と世代をつなぐ造形活動—質問紙調査にみられる学生の学び—, 大学造形美術教育研究, 第12号, pp. 35-41.
- 矢野真・田爪宏二・吉津晶子 (2015). 保育者養成に関わる造形領域における実践的教材の開発—造形活動を通じた幼児と高齢者間の世代間交流に対する支援事例から—, 京都女子大学 発達教育学部紀要 第11号, pp. 127-134.
- 矢野真・吉津晶子 (2012). 保育者養成校における子どもと高齢者をつなぐ造形活動, 第3回日本世代間交流学会 全国大会 要旨集, pp. 41-42.
- 矢野真・吉津晶子・田爪宏二 (2013). 保育者養成における地域と世代をつなぐ造形活動, 第4回日本世代間交流 学会全国大会要旨集, p. 48.
- 吉津晶子・溝邊和成・田爪宏二 (2012). 保育者養成課程におけるクロス・トレーニングの試み—幼老統合施設における実習と参加学生の意識調査—, 日本世代間交流学会誌, Vol. 2, pp. 69-78.

付記

本研究は、平成27年度科学研究費 基盤 (C) 研究課題 (課題番号: 15K04324) 「保育者養成におけるコミュニケーション能力を育成するための造形教材の開発」 (研究代表者: 矢野真, 分担者: 田爪宏二) の補助を受けて行われたものである。